



優秀賞
EDGEMATRIX株式会社
株式会社NTTドコモ

「EDGEMATRIX」サービス

映像AIの活用推進へ、エッジ端末セットのプラットフォーム

DATA

活用領域・解決する課題 映像データ活用の推進、エッジAI運用負荷の軽減

テクノロジー・デバイスキーワード エッジAI端末、遠隔管理、アプリケーションプラットフォーム

AIの活用において期待が寄せられる映像活用。人の眼の代替として入手できる情報量が多く、防犯や災害対応から交通、マーケティングまで利用分野も幅広い。

ただ、実用化の数はまだ少ない。映像AI活用ならではの、次のような課題があるからだ。

- ・人のプライバシーを守る運用
- ・遅延のないリアルタイム処理
- ・多様な利用場所への対応
- ・大容量データの通信コスト
- ・対応技術が広く、1社ではカバーしにくい

そこで生み出されたサービスが、EDGEMATRIXとNTTドコモが協同展開する「EDGEMATRIX」である。

太田洋社長は次のようにサービス内容を説明する。

「エッジ端末とサービスプラットフォームを1つにセットにしました。シス

テム構築時の負担を抑えつつ、日進月歩のAIアプリケーションは現在30社を超えるパートナーとの連携で提供します。1社ですべてを囲い込まないほうが市場は活性化するからです」

エッジだから対応できる プライバシーとリアルタイム性

同サービスでは、「Edge AI BOX」と呼ばれる映像AI解析・通信機能を備えたハードウェアを提供。ここに目的に沿ったAIアプリケーションをインストールする。エッジ端末内でAI処理を行い、必要なデータは5G/LTEでクラウドに送信できる。

エッジ処理は冒頭に挙げた映像AIの課題を解決する。同社の鈴木紀行氏はこう説明する。

「映像AIの対象は、人、車、ものに分けられます。人に関しては防犯カメラを除き、プライバシーを守るために



EDGEMATRIX 代表取締役社長 太田洋氏(写真左から二人目)
同 執行役員 鈴木紀行氏(左)
NTTドコモ 5G・IoTビジネス部 産業イノベーション推進 担当部長 高橋和彦氏(右から二人目)
同 担当課長 浪江聡志氏(右)

人物映像を残さないのが原則です。人数カウントならエッジ端末内で数え、数字だけをクラウドに上げる運用ができます」

例えば顔認証でドアを開閉するとき通信遅延が起きれば実用レベルに至らない。通信費用面でもエッジ処理が有効なケースが多いのだ。

もちろん必要な時や緊急時にはネットワーク経由で映像を即時に見ることができる。

「EDGEMATRIX」では、アプリケーションのインストールや変更をはじめ、デバイスの状況確認やストレージの使用量などをリモートで実施できる遠隔管理コンソールを備えており、運用時の負荷を軽減できるのも特徴だ。

「携帯電話時代におけるiモードのような気軽さを映像AIの分野で提供したい。例えば介護分野では、お手洗いにいく途中で転倒したが気づかないという事故があります。映像AIを使って転倒を検知できれば、少ない介護士でより安全な施設経営ができるでしょう」と太田社長は言う。

AIの社会実装と、より良い社会への変革を下支えする。

図 「EDGEMATRIX」サービスの概要

